

3月1日ゼミは開催します

5世紀から7世紀にかけての朝鮮半島と倭国の交流—3月1日ゼミ要旨:永井輝雄会員記

今回、私は、日本でいえば雄略天皇から天智天皇（白村江の戦いのあたり）までの、すなわち5世紀半ばから7世紀後半頃までの、わが国と朝鮮半島との政治外交史的な話をいたしますが、その前に、5世紀ごろまでの朝鮮半島三国の歴史をごく短く説明いたします。

高句麗は、貊族主体の国で、高句麗という固有名詞が登場する最も古い記録は、『漢書』「地理志」で、前漢武帝の時代の紀元前107年、玄菟郡の首県として高句麗の名があがっている。高句麗国の建国は、『三国史記』の伝説では、前37年となっている。209年、鴨緑江の中流域北岸の国内城（現在の中国吉林省集安市）に移った。高句麗は、美川王（在位300～331）の時代の313年、中国が半島支配の根拠地としていた楽浪郡・帯方郡を陥落させ、楽浪郡・帯方郡は高句麗が支配することになった。317年西晋が滅亡し、319年、慕容氏が遼東を確保すると、高句麗と慕容氏は直接対峙することになった。前燕の王となった慕容皝は342年、5万の大軍をもって、敌国原王（331～371）の高句麗の丸都城を壊滅させた。

馬韓の伯济国から興った百濟は、近肖古王（346年～375）の時代に、漢江の南岸に王城を構えた。この王が、実在したことが確認できる最初の百濟王である。372年、百濟の近肖古王は、太子とともに3万の兵を率いて高句麗の平壤城を攻撃し、高句麗の敌国原王は流れ矢にあたって戦死した。

辰韓の斯盧国から興った新羅は、奈勿王の時代（356年頃）に、現在の慶尚北道・慶州を

都に定めた。新羅は、377年、高句麗使にとともになわけて前秦に朝貢し国際舞台に登場した。新羅は、高句麗に従属する形で勢力を伸ばしていった。

391年、高句麗では、18歳の広開土王が即位した。広開土王碑には、396年の百濟王都の漢山城の攻略、400年の新羅に救援軍派遣、404年の帯方郡に侵入した百濟・倭軍を撃退、407年の歩騎5万を派遣し敵に大勝など、領土拡大に関わる戦績が述べられている。

413年、広開土王が死去し、息子の長寿王が即位した。その治世は79年間に及び、高句麗の領土拡大も頂点に達した。長寿王は、427年には平壤に遷都し、朝鮮半島の南方経営に本格的に乗り出した。

私の話はこの後、5世紀後半頃から始まります。

1. 百濟の蓋鹵王・東城王、倭の雄略天皇の時代

461（雄略5）年、百濟の蓋鹵王は、自分の妃の一人を弟の昆支王にめあわせて倭国に派遣した。妃は、妊娠していたが、筑紫の各羅嶋で出産した。その子は島君と名付けられた。これが後の武寧王（＝斯麻王）である。昆支は、百濟王の弟であり、倭国における立場は、文献上明確には書かれていないが質（＝人質）である。王族の「質」は、たとえば言えば、倭国に駐在する百濟大使であり、駐在国と友好親善に努めるとともに、国益に寄与するために努力する役割を帯びていた。百濟に対する高句麗の軍事的圧迫は、440年頃から続いていた。昆支の役割は、百濟の対高句麗戦に倭王権の軍事力を引きずり込むことだと考えられる。

472（蓋鹵王18）年、百濟の蓋鹵王は、北魏の孝文帝に遣使し、高句麗との激しい対立の歴史と現状を訴えて、北魏の支援を請う内容の上表文を奉った。北魏はこの要請には応えなかつ

た。

475 (長寿王 63) 年、高句麗の長寿王は 3 万の兵を率いて、百済に侵入し、百済の王都の漢城を陥落させ、百済の蓋鹵王を殺害し、男女 8000 人を捕虜として引き上げた。文周王は蓋鹵王の母の弟である。高句麗の漢城攻撃の際、蓋鹵王は文周王を新羅に派遣して救援を求めさせ 1 万の軍隊を率いて帰って来たが間に合わなかった。城は破壊され蓋鹵王は死去していたので、文周王は王位についた。

477 (雄略 21) 年 4 月、文周王は、蓋鹵王の弟の昆支を内臣佐平に任命し、文周王の長男の三斤を太子とした。昆支は 7 月死去した。9 月文周王は死去した。

477 年、三斤王が王位を継いだ。478 (雄略 22) 年、宋の順帝に対し、武 (= 雄略) が使者を遣わし上表文を奉った。その中で、高句麗の不当性を訴え、宋王朝に対高句麗戦への支持を要請した。順帝は詔して、武を使持節・都督倭新羅 任那 加羅 秦韓 慕韓六国諸軍事・安東大將軍・倭王に叙した。しかし、宋は末期状態だったので対高句麗戦への支持を訴える倭王の要請に応えることはなかった。宋は 479 年滅亡した。

479 (雄略 23) 年 4 月、百済の三斤王が死んだ。雄略天皇は、昆支王の第 2 子の末多王を百済国王とした。そうして兵器を与え、あわせて筑紫国の兵士 500 人を遣わして、護衛させて国に送り届けた。これが東城王である。筑紫の安致臣・鷲飼臣らは、船軍を率いて高麗を撃った。

2. 百済の武寧王、倭の継体天皇の時代

502 年、百済の末多王 (東城王) は無道で人民に暴虐な行いをしたとされ、国民は末多王を排除して島主を立てた。これが武寧王である。諱は斯麻王という。武寧王が即位したときの年齢は数えて 41 才である。武寧王がいつヤマトから百済に帰国したのかを裏付ける資料はないが、長年ヤマトで百済の「質」の役割を務め、末多王の末期に百済に帰って即位したと考えたい。

502 年に即位した武寧王は、翌 503 年には、百済の重臣 2 人を派遣して、倭国の実力者となったフト王の即位を期待し、前王 (末多王) の修好を継受する旨を伝えさせ、記念の銅鏡を造らせた。それが、隅田八幡神社に所蔵されている人物画像鏡であり、その鏡の銘文には「癸未年、斯麻王が、ヤマトの意紫沙加宮 (惣坂宮) に居

た孝弟王 (彦太王 = 即位前の継体天皇) の長寿を願って、百済の重臣を派遣し、銅鏡を造らせた」旨の文章が刻まれていた。斯麻王と孝弟王は旧知の間柄と考えたい。

505 年、武寧王は、百済王族の斯我若 (= 淳陀太子) を派遣してヤマト王権に朝貢した。507 年、継体天皇は楠葉宮で即位した。

【任那四県割讓】512 (継体 6、武寧 11) 年、百済は「任那国の上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁の四県」を要請し、倭国は賜与したとされている。任那の四県とは、全羅北道・全羅南道の榮山江東岸・西岸のあたりであり、『日本書紀』では、倭国がここに直轄地を持っており、その地を百済に賜与したことになるが、現在の日本の古代史家は、錦江流域の熊津に都を遷した百済王が、512 年までの間に、支配する領域を南の榮山江流域までひろげるため、倭国に、領土拡張の支持を求めたのだと考えている。

【半島の前方後円墳】日本列島にのみ存在すると考えられた前方後円墳が、6 世紀前半の榮山江流域に、現在まで 13 基以上確認された。その被葬者の性格について、在地首長説と倭人説にわかれて論議が行われてきた。

【百済の己汶・帯沙進出】513 (継体 7、武寧 12) 年、百済が倭に五経博士段楊爾を貢上した。それとは別に、伴跋の国 (= 大加耶 = 加羅 = 高靈) が、百済の己汶の地を掠奪したので百済に返還するよう求めた。そこで、倭国は、百済の使者と斯羅・安羅・大加耶の関係者を招集・協議し、倭国の判断を伝え、己汶・帯沙を百済国に与えた。514 (継体 8 年)、倭国の判断に不満な大加耶は、武力による実力行使に出る。515 年、百済の使者は帰国したいと願ったので、物部連を付き添わせて帰国させた。物部連らは、500 人の船団で向かったが、大加耶の恨みが強いことを聞き、帯沙江に停泊し、百済の使者は、新羅を経由して百済に帰った。同年、大加耶が兵を起こして攻撃してきた。物部連らは恐れて逃亡し、辛くも汶慕羅島に退いた。516 年、百済は物部連らを己汶に迎えてねぎらい、先導して百済に連れ帰った。同年 9 月、百済は倭に使者を派遣して己汶の領地を認めた謝礼を述べ、五経博士漢高安茂を貢上して、博士段楊爾と交代させるよう願い、要請の通り交代させた。

【大加耶と新羅の婚姻同盟】522 年 (継体 16、武寧 21、新羅の法興王 9) 年、大加耶の国王が

新羅に使者を派遣して、花嫁を求めてきたので、新羅の法興王は、王族の妹を大加耶に送った。大加耶と新羅との婚姻同盟である。しかし、529年、新羅が、新羅から大加耶に来た花嫁の従者100人の衣冠を加羅風から新羅の衣冠に改めたので、大加耶の国王は、新羅の侵略意図を感じて、婚姻同盟は破綻した。

523年、武寧王が薨去した。524年、武寧王の子の聖王（聖明王）が即位した。

【多沙津を巡る抗争】529（継体23）年、百済の聖明王が、穂積押山臣に、「加羅（大加耶）の多沙津（蟾津江河口の海に面した港）をわが国の朝貢の津路として欲しい」といった。そこで押山臣は、その要請を倭国に伝えた。倭国は、物部伊勢連父根・吉士老を派遣し、津を百済王に譲渡としようとした。その時、加羅（大加耶）の王が、「この津は、わたしどもが朝貢する港にあります。どうしてたやすく隣国に譲渡することができましようか」と使者に言った。使者の父根らは、これによってこの場で直接賜うことは難しいとみて、大嶋に退き、別に録史を派遣して、結局、百済に譲渡した。

531（継体25・聖明9）年2月、継体天皇が崩御した。82才であった。

3. 新羅の法興王・百済の聖明王と倭の欽明天皇の時代

5世紀半ば頃までは高句麗の服属下にあった新羅は、法興王（在位514～540年）の下で国家体制の整備が進められ、520年代には、洛東江以西の伽耶地域を統合すべく侵攻を本格化させていった。

524（継体18、武寧24、法興11）年、新羅は金官国さらに曷己吞へ侵攻した。それに対して、草淳・安羅などの加耶南部諸国は、同盟関係にあった倭に救援を要請した。

527（継体21）年6月、近江の毛野臣は、6万の兵を率いて任那に行き、新羅に破られた金官国と曷己吞を復興しようとしたが、527年、筑紫で磐井の乱が起こったために実現せず、529年、改めて毛野臣が派遣された。新羅は、上天等（最高位の官）の曷斯夫が軍を率いて金官国に進撃した。毛野臣は、新羅の侵攻に対して結局何もできないままに後退した。曷斯夫は、金官国を攻撃してそれを構成する四村を抄略し、曷己吞と草淳へと西進していった。金官国は、これによって壊滅的な打撃を受け、532年にな

って、王及び王族の新羅への投降という形で、最終的に滅亡した。

一方、百済は、帯沙から安羅へ歩を進め、531年に安羅へ進駐していた。新羅はその目前の草淳に侵攻し、加耶南部地域において、百済と新羅が直接対峙する形勢となった。そして、この戦線は、しばらく膠着状態に陥るのである。

百済は、538（聖王16）年、熊津から泗泚に遷都し、中央集権的な地方統治を始め、国内に郡将・城主を設置した。

539年宣化天皇が崩御し、欽明天皇が即位した。

【任那復興会議】541（欽明2）年、百済の聖明王は、任那の草岐（首長）たちを百済に集めて、倭王欽明の詔を示して、任那を「復建」する策を相談した。544（欽明5）年にも、同様な会議が開催された（『日本書紀』）。学者は、これを名付けて「任那復興会議」と呼んでいる。復建すべきという「任那」とは、新羅に滅ぼされた南加羅（金官）・草淳・曷己吞である。

百済の聖明王が開催した「任那復興会議」は、開催名目である「三国の復興策を各国が審議する会議」とは程遠く、聖明王が、新羅に接近をはかり百済と利害が異なるようになった安羅など加耶諸国に対して、新羅と通好しないよう働きかけを行う場であり、さらには、百済が538年下韓（多沙津から安羅に至るルート上の地域）に配置した郡令・城主を安羅に事後承認を求める場であった。「会議」は、結局、何も決めることなく終わった。安羅は、この後、新羅に降った。その時期は、大加耶連盟諸国が最終的に新羅に降伏する562年より早かったとみられる。倭と加耶南部との関係は、「任那復興会議」の段階で、ほぼ終焉を迎えたのであった。

私の朝鮮半島と倭国と交流の話は、天智天皇の時代まで続きますが、あとは当日の話とさせていただきます。以上。

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館（水道橋駅）・中会議室（5階）
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
- 3、会場には12時30分から入場できます。

投稿文を募集します

ただし ニ

投稿文が枯渇しています。ニュースに掲載する投稿文を募集します。投稿文は会員の皆さんの自由なご意見の場です。内容は、ゼミ講演での感想や意見、感銘を受けた読書の感想、旅行先での体験や新しい発見、内外の世相に関する意見、個人の体験や思い出等を記載いただき、交流を深め、又、知見を共有したいと思います。多くの会員の参加を期待します。どうぞ、得意分野をご披露下さい。

次回4月5日ゼミ・テーマ

4月5日の「武蔵の古代史」は、講師の都合で7月5日に変更となります(前号で告知済み)。そこで、4月5日ゼミは、講師による講演ではなく、当日参加者による全員参加型で、双方向の活発な討論会にしたいと思います。就いては、下記の要領で行いますのでよろしくご協力下さい。

記

1、当日参加会員の入会動機・入会後の印象・会への要望等を開陳して下さい(お一人2分間)。

2、歴史情報交換と討論

ここ2～3年で話題となった人類情報(フローレス原人・日本列島の旧石器時代遺跡・ゲノム分析による日本人の祖先)を取り上げます。詳細は次号の古代史ニュース344号に記載します。4月ゼミでは、上記の情報に基づいて、参加者と討論形式で、情報の深堀や論点の明確化を図り、会員間で共有したいと思います。

3、拡大世話人会開催(予定)。

今後の会運営とその問題点等を共有し、多くの会員が、ボランティア精神を発揮して頂き、当会が今後も永続できるようにご協力をお願いします。

以上。